“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために
―― 3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（2）――

新　原　道　信

目　　次

1. はじめに
2. “未発の状態（stato nascente, nascent state）”
3. “未発の社会運動（movimenti nascenti, nascent movements）”――到達点としての〈毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動〉――
4. “未発の状態／未発の社会運動”をとらえるための“未発の”理論と方法へ

私がベルリンに居るということは，私の直接的な現在であるが，これはここに来るまでの旅によって媒介されている。
Daß ich in Berlin bin, deiese meine *unmittelbar* Gegenwart, ist *vermittelt* durch die gemachte Reise hierher.

G. W. F. ヘーゲル『小論理学』第 66 節
（Hegel 1970：157 ）

1. はじめに

「わたしがここに居る，ここに在る」とは，いかなるコトか？　出会ったすべてのひと，土地，ことがらとの“交感／交換／交歓”によって成り立っているということをまず意識すること，さらにはその組成（関係性の運動の道行き）を理解しようとすることが，知的営み，さらには“創起する動き”，“創造的プロセス”の第一歩である。

本稿は，筆者にとっての二人の師友 A. メルッチ（Alberto Melucci）[1] と A. メルレル（Alberto Merler）[2] との間で積み上げてきた“社会学的探求（Sociological Explorations/Esplorazioni sociologiche）”[3]，とりわけ「3.11 以降」に積み重ねてきた「“惑星社会の諸問題”への社会学的探求」の一部をなしている[4]。

今回，考察を深めたいと考えているのは，顕在化し可視的なものとされている「出来事」の水面下に潜在しつつ，流動し変化し蓄積されている状態とその社会過程――“未発の状態（stato nascente, nascent state）”と“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動（movimenti nascenti, nascent movements）”[5]――をとらえる（perceiving, listening, sensing）ための理論と方法についての問題である。

メルッチ，メルレル，筆者は，以下のように考えた：

グローバル化・ネットワーク化と同時に，根源的な有限性の問題を抱える“惑星社会（the planetary society）”とそこで地域生活を営む具体的な個々人の内面から構造をとらえたい。しかしながら，調査者にとっても日常生活者にとっても，いままさに生起しつつある“未発の”ことがらを洞察することはきわめて困難である。なぜなら私たちは常に，過去の思考の形式・準拠枠によって，現在を見ている（たとえば，個人や構造を外側から見る思考や，ミクロをミクロとして見るような「知的様式（intellectual style）」によって拘束されている）からだ[6]。

私たちの「日常」は，社会的大事件のみならず個人の病，死も含めて，“未発の事件（avvenimenti

nascenti)”によって満たされている。「日常生活」を生きるものにとって，「想定外の」災害や事故，「予期せぬ」病気など，いわば“見知らぬ明日（unfathomed future, domani sconosciuto)” は，閉じたいと思っていた目をこじ開けるようにして「まったく突然に」やって来る。このとき私たちは，たった一人で“異郷／異教／異境”の地に降り立つような感覚を持たざるを得ない。すなわち，やって来る（avvenire）ものとして知覚される“事件（avvenimenti, events)”は，実は既にそれに先立つ客観的現実の中に存在していたのであって，ただ私たちが，眼前の“兆し・兆候（segni, signs)”に対して“選択的盲目”を通していたにすぎない。

「生まれつつある，生起しつつある（nascente)」という言葉を「未だ発したり現れたりはしていない」という意味の“未発の”と訳したことには，理由がある。私たちは，既存の「知的様式」の枠内で「生まれつつある，生起しつつある」という「線」と，“事件（avvenimenti, events)”という「点」を分けて考える[7]。ここから，「前」と「後」という思考態度（mind-set）が生じる。しかし，私たちの「直接的な現在」は，冒頭のヘーゲルの言葉にあるように，この地点に「来るまでの旅によって媒介されている」ものである。その旅の途上では，はっきりと“知覚（percezioni, Wahrnehmungen)”されるものではないにせよ，様々な“兆し・兆候（segni, signs)”に遭遇していたかもしれない。

知覚としては，「未だ発現していない」ものではあるが，“予見［的認識を］する（prevedere)”とはいかないまでも，やって来る“事件（avvenimenti, events)”の“兆し・兆候”を“うっすらと感じる／予感する（ahnen)”ことはあるのではないか，そして十分な「自覚」や「意識」を持たなかったとしても，非意識的に，“心身／身心現象（fenomeno dell'oscurità antropologica)”としては，微細な動きを起こしてしまっているのではないか。すなわち，〈内的なプロセス，目に見えない，当人にしか体感し得ない，生理的・感情的なプロセス〉と同時に，〈顔の表情やしぐさ，雰囲気などの身体表現〉によって，「媒介された」“兆し・兆候”を潜在的にもしくは身体表現として，perceiving, listening, sensing しているのではないか[8]。

それゆえ，“未発”であるとされた局面をもう一度見直していくと，実はすでに「そこに在った」ものを“サルベージ（沈没，転覆，座礁した船の引き揚げ，salvage, salvataggio)”することが出来るかもしれない。さらには，ある特定の条件，“根本的瞬間（Grundmoment)”においては，過去と未来という非在の間の全体である「直接的な現在」のなかで，「生まれつつある，生起しつつある動き（movimenti nascenti, nascent movements)」をとらえることもできるのではないかと考えた。ここから，“未発の状態”と“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動”をとらえるための理論と方法に取り組んできた。

2. “未発の状態（stato nascente, nascent state)”

メルッチは，「私たちは，まさにはじめて本当の意味で人類史の岐路に立っています」（Melucci 2000f=2001：2-3）と言った[9]。「人類史の岐路」に立つ現代社会をとらえるため選んだ“未発の状態（stato nascente, nascent state)”という言葉には，いくつかの“背景（roots and routes)”が存在している。ファシズムの時代の格闘のなかでつかみなおされた概念である「ペリペティア」（真下信一），アルベローニからメルッチにいたるイタリアの社会運動研究，そして，政治思想史家の鹿野政直による日本の民衆史と社会史のとらえなおしである。

以下では，“探究／探求の技法（arti di ricerca/esplorazione, art of exploring)”として，“対位法（contrapunctus)”を採用する。社会過程，

社会現象を因果関係のみから解釈するあり方を相対化するため「対位法的読解（contrapuntal reading）」を試みたE.サイード（Edward Said）は，その著書『始まりの現象』のなかで，『新たな学（Principi di scienza nuova d'intorno alla natura delle nazioni）』（初版1725年，二版1730年，三版1744年）の著者G.ヴィーコ（Giambattista Vico）と「対話」しつつ，「始まり（beginnings）」とは何か，それはいかなる「活動（activity）」「瞬間（moment）」「場所（place）」「心構え（frame of mind）」を持つものかについて考察している（Said 1975=1992：xivページ）。

顕在化し可視的なものとしてとらえうる「出来事」の水面下に潜在しつつ流動し変化し蓄積されている状態とその社会過程という，測定あるいは把捉の困難・限界を抱える対象に対して，“［何かを］始める（beginning to）”ためには，異なる境界線の引き方，補助線の引き方を提示することで“メタモルフォーゼ（変身・変異）”を誘発する必要がある。「新たな学（scienza nuova）」を構想した哲学者G.ヴィーコが生きたバロック時代のヨーロッパの音楽は，低音部の音の進行を司る「通奏低音（Basso continuo」とそれぞれの旋律が多声をつらねるかたちで音楽を形成していく「対位法」が基本であった。ヴィーコの同時代人であり，「通奏低音」と「対位法」を重視したバロック時代後期の音楽家J.S.バッハ（Johann Sebastian Bach）は，楽曲の構造のみならず，楽器や演奏する建築物の構造までもよく理解していた。

ここでは，バロック時代の智者であるバッハやヴィーコ，そして同時代人サイードに敬意を払いつつ，自前の“対比・対話・対位”の方法を“始める”ことを意識しつつ，具体的記述へと入っていきたい。

2-1.「3.11」と「ペリペティア」の“対位法”

2014年9月23日，夏期休暇明けの最初の講義において，学生たちに下記の二つの文章を配布した。“未発の状態”という言葉は，1945年と「3.11以降」の「ペリペティア」を“対比・対話・対位”することを含意している。

§2014年のbanalとurgentのペリペティア
―― Beginning to think planetary at the banality

私たちは，どこか遠くの「ささいな，とるにたらない，ありふれた，陳腐なもの（banality）」が，突然，我が身に深くかかわる「厄災」や「焦眉の問題（urgent problem）」として，“わがこと，わたしのことがら（cause, causa, meine Sache）”に変転する社会に生きていることを，うっすらと知ってはいても，実感はできない。「まあたしかに，そういうことはあるかもしれないが，自分は大丈夫ではないか，そうであってほしい」と思って，そのこと考えるのはやめておく。考えたほうがいいかという気持ちになるときもあるが，ＴＶであれ本であれ，たとえば，「地球温暖化」や「貧困・格差」への「対処法」はパターン化されていて，あまりピンとはこない。「もっとすっきり言ってほしい」と思ったりする。Ｔシャツ，チョコレート，携帯，いま自分が使っている身近な品物（banal things）がどのように作られているかをテーマにした番組を偶然見かけた。「現地」はたいへんらしい。「誰かが犠牲になるのは歴史的にはよくある話だったんじゃないか」，いや「なんとかしなければいけない」。いずれもそうかもしれないが，どうしていいかわからず困ってしまう。最初は驚いたが，自分が考えるには複雑すぎて，何度か目にするうちに，頭のなかでは「陳腐な問題（banal questions）」へと分類されていった。

身体のことも少し考えようと，ジョギングをして帰って来たら，突然，高熱が出た。ふだんだったら，よくある症状（banal symptoms）だと思っただろうが，ちょうど最近は，「感染症」というのが話題になっていたので，少し心配になり，病院に行ってみた。すると「デング熱です」と言われた。「話題になった公園に行ったわけではないのに」「なぜ自分が⁉」「明日のアルバイトはどうする」……，こうした考えが頭の中でぐるぐると回り出した。自転車での帰りがけ，雲行きが急に怪しくなり（最近は，東京でもゲリラ豪雨やヒョウが降るなど，

突発的な気候の変化が起こりやすいようだ），あっという間に突風と雷，そして豪雨となった。熱でふらふらとしながら大学近くのアパートに帰りつき，ベッドで横になると，サイレンがなり，土砂災害の危険があると言う。高度成長の時代に「盛り土」で急造された宅地はとくに危険なのだという話をどこかで聞いたことをふと思い出した。高熱にうなされ，起き上がることも出来ない。山沿いのアパートから脱出することが出来るだろうか。近所付き合いをしておけばよかった。泥臭い空気が換気扇から逆流してきた。「まずいかもしれない⁉」とインターネット上に書き込みをいれたところで轟音が……。

この「寓話」を書いている 2014 年 9 月現在，たてつづけに，「大型台風」「デング熱」「土砂災害」といった「事件」に直面している。

「寒サノ夏ヲオロオロ歩」いたのは宮沢賢治だけではない。この惑星の各地で暮らす人々は，洪水，干ばつ，台風，火事，地震，様々な厄災に打ちのめされながらも，また瓦礫のなかから自分たちの生活をつくった。長い時間の流れのなかで，個々の地域生活においては，個々人の無数の創意工夫と労苦によって，文化の蓄積がなされてきた。しかしいま起こりつつある地球規模の気候変動は，こうした個人的・集団的努力での対応の規模をはるかに越え出ている。

「二酸化炭素（CO_2）排出量」に関する報道は急増し，私たちは「それはもう知っている」「わかっている」と感じるようになっている。気温の上昇で耕作可能な作物は変化し，これまで発生しえなかった伝染病がひろがっていく。気温上昇にともなう環境変化の結果に関するシミュレーションは「科学的に可能」だ。しかし，化石燃料の使用制限や地球環境そのものへの働きかけの方向性は，人間の社会そのものの“線引き（invention of boundary）”のあり方と結びついている。

「（國破レテ）山河アリ」はもはや自明のものではなくなってしまった。85 センチの海面上昇で日本の三倍以上の地域が沈み，2 億 6,000 万以上の人々が環境難民となっていく。環境の変化によって移住を迫られる人々は別の地域の人々との間のコンフリクトに直面する（地域紛争）。「台湾でデング熱が発生した」という報道に対して，「水際で食い止める」という「保安対策」が処方される。しかし，陸は海でつながり，空港からウィルスが運ばれていく。都市国家アテネが滅びる原因となったのも伝染病だった。私たちは，「変わらぬ自然」と「変わり果てた自然」の二つの報道の間に立って暮らしている。いまのところ自分には関係ないので「まあいいか」と思いつつ。

放射能汚染，大地震，噴火，感染症が“生身の現実”である列島に生きることは，認識すべき「状況」のひとつであるが，こうした客体的「状況」以外にも，危機の時代に直面する側の「条件」の問題がある。たとえばいま私たちは，新たな大震災を恐れているが，火山の噴火にはそれほどの注意を払わない（「焦眉の問題（urgent problem）」としての位置付けは弱い）。しかし富士山の噴火はわずか 300 年前に起こったことであり，雲仙普賢岳の火砕流発生や三宅島の噴火は，つい「最近の出来事」だ。9 世紀には，多発的に地震・噴火が起こっていたが，史実に残る「希有な天変地異」と類比されるべき「（これからの／いますでに始まりつつある）地殻の大変動期」は，今日の自然科学にとっても「前人未踏の地（no-man's-land）」でありつづけている。ではごくふつうの人間は，“見知らぬ明日”をどう生きるのか。仕事や結婚といった日常生活は，いままでは遠き“端／果て”にあると思っていた“惑星社会の諸問題”を無視しては成り立たない。突然やって来る「ある日」は，自分たちのかたわらにすでに在って，息をひそめて出番を待っている。

§1945 年のペリペティア

いかなる事実にも，いかなる出来事の新しさにも，あたかも絶縁体でしかないようなファナティシズムを別とすれば，八･六と八･一五は日本のファシスト的戦争劇における最大のペリペティアであった。主人公たちの頭と心のなかで「無知から知への急転」がそこで生じねばならないはずの「認識の場」であり，ドラマの窮極の意味が「そうであったのか！」というかたちで了解されるべきラスト・シーンであった。もとギリシャ語のペリペティアは，ことに，悪しき状態への，人間的災禍への急変という意味を持つものであるが，八・六と八・一五のパニック，自己をも含めてこの国民の最大の災禍をかかるものとして率直にみとめ，つづい

て，「最後に」このような「結果としてあらわれ」たものが「客観的現実のなかにすでにとっくに存在」していたことを承認し，この確認にもとづいてあの「本質」をたぐりだし，その「本質」への自己のかかわり合いを明らかにしようとすること，このことが責任性の問題一般が生じうる必須の条件なのである。

「八・一五」をわれわれは見た。それは事柄の事実的経過のなかで「うわべのまやかし」が一枚一枚と剥ぎとられてゆくそのとどのつまりに，むき出しの「本質」としてあらがいがたく目前に横たわったものであった。それを各自が見たと思ったそのイメージを保ちながら，あの歴史的経過を逆にたどれば，数々の「うわべのまやかし」が，あたかもフィルムの逆回転のなかでのように，一枚一枚と各自の持つ「本質」のイメージの上へ戻されてゆく。この後からの積み戻しのなかでは，新しく暴露された諸事実の知識が加えられつつ，ひとは事実的経過のなかにかつて巻き込まれていたときよりも，はるかに聡明にふるまうことができる。「本質」のイメージは多少とも見直され，この見直された「本質」観が，かつての自己に対置される。それゆえに，各人の自己批判，自己責任の追及の仕方は，「本質」のそれぞれの見直し方に相対的であるよりほかはない。真下信一「思想者とファシズム」（真下 1979：165-167）。

この文章を配布してすぐの9月27日，私たちは，「御嶽山噴火」のニュースに直面することとなった。知識人にとって「汚辱の時代（l'epoca d'infamia）」（古在由重，ボルヘス）であった1930年代から「8.15」にいたる道行きを生きた思想家・真下信一は，イプセン，G.ルカーチの系譜をふまえつつ，「主人公たちの頭と心のなかで『無知から知への急転』がそこで生じねばならないはずの『認識の場』であり，ドラマの窮極の意味が『そうであったのか！』というかたちで了解されるべきラスト・シーン」として「ペリペティア」という概念を置いた。

「8.6」や「8.15」がそうあったように「3.11」もまた，私たちにとっては，「悪しき状態」「受難」への「悲劇的急転（ペリペティア）」であった。「3.11」が起こり，これから新たにゼロから“始める”のでなく，すでにつくりだされてしまったモノや，つくりだされてしまったコトを認識するしかない。これからどうするか以前に，すでにつくりだされ循環し滞留してしまっているリスクの存在を「（うっすらとは予感していたが，やはり）そうであったのか！」と認めるしかない。その意味において，統治困難な「除染」や「汚染水」の問題は「3.11以降の状況」のメタファーである。

「3.11後」ではなく「3.11以降」という言葉の選択には，「突然，想定外の事件が起きたが，それは『おわった』こととなり，また『もとどおり』のありかたへと復興していく」という思考態度（mind-set）とはことなる方向性がこめられている。「3.11後」はなかなか始まらず，今後の社会の行く末が定まらぬまま，「岐路」に立ち続けている。しかも，日本社会とそこに生きる私たちの「状況・条件」は，「震災，津波，原発事故」で変わってしまったのではない。“多重／多層／多面の問題”は，「3.11以前」にも“未発の状態（stato nascente）”で「客観的現実のなかにすでにとっくに存在」し，「3.11」はその問題が顕在化する契機となったにすぎない。

「……過去を歴史的に関連づけることは，それを『もともとあったとおりに』認識することではない。危機の瞬間にひらめくような回想をとらえることである」（Benjamin 1974=1994：333）にあるように「最後に結果としてあらわれ」るものが「客観的現実のなかにすでにとっくに存在」していることを，どのように認識し直していくのか。

2-2.「発生期（stato nascente）」と「未発の一揆」の“対位法”

“未発の状態”という言葉は，第二に，イタリアと日本の社会と社会運動を“対比・対話・対位”することを含意している。

1960年代後半，「イタリアの熱い秋」のなかで，社会学者アルベローニ（Francesco Alberoni）が

提起した「発生期（stato nascente）」は，社会運動におけるミクロな動き（情動的な体験）とマクロな動き（集合行動）の結節点となっている「場」を表そうとするものだった（Alberoni 1968；1989）。心理分析と構造分析を架橋するという試みは，そのふたつのアプローチに実は通底していた，社会運動の生成期・成長期・沈静期を「線的」にとらえるという枠組みに拘束されていた。しかし 1968 年以後の世界の“道行き・道程（passaggio：移行，移動，横断，航海，推移，変転，変化，移ろい）”と重ね合わせて考えてみるならば，ことなる社会認識の文脈でとらえかえされることになるだろう。すなわちこの問題提起は，線的な移行過程の一段階であるというよりは（たとえば「固有性の消失」から「画一化」へという単線的な経路［ルート］ではなく），一見かかわりのなさそうな，些末で“端／果て”の意味しか持たないとされていたものが，それぞれに固有の動き方をしていき，同時に多方向的に，複数の異なる仕方で，“メタモルフォーゼ（変身・変異 change form / metamorfosi）”していくということが，むしろ常態となりつつあるという意味での“未発の状態”が顕在化するという「状況」が，現代社会に固有の「条件」となっている――このような見方から社会の「発展」を理解するための問題提起として再評価することができるはずだ[10]。

臨床社会学と社会運動論を架橋しようとしたメルッチは，主著『プレイング・セルフ』の冒頭で下記のような認識を提示している。

> 来る日も来る日も，私たちは慣習的な行動をとり，外的（external）であったり私的（personal）であったりするリズムに合わせて動き，数々の記憶を育み，将来の計画を立てる。そして他の人々も私たちと同じように日々を過ごしている。日常生活における数々の体験は，個人の生活の単なる断片に過ぎ，より目に見えやすい集合的な出来事からは切り離され，私たちの文化を揺るがすような大変動からも遠く隔てられているかのように見える。しかし，社会生活にとって重要なほとんどすべてのものは，こうした時間，空間，しぐさ（gestures），諸関係の微細な網の目のなかで明らかになる。この網の目を通じて，私たちがしていることの意味が創り出され，またこの網の目のなかにこそ，センセーショナルな出来事を解き放つエネルギーが眠っている（Melucci 1996a=2008：1）。

すなわち，ひとびとの情緒や情動的な体験は，「集合的な出来事」や社会的な「大変動」とは切り離され，「単なる断片」とされてしまいがちであるが，見えにくい，内的なプロセスも含めたミクロな動きも含めた「諸関係の微細な網の目」の“未発の状態（stato nascente, nascent state）”が，「より目に見えやすい」「センセーショナルな出来事」を準備するという認識である。そして，同書の第一章「日常の挑戦」では，「諸関係の微細な網の目」に分け入り，「体験のなかの時間」「時間と空間を構築する」「内なるリズム，社会のリズム，宇宙のリズム」という項目を立て，「内的時間」「身体に宿る時間」の「“多重／多層／多面”的で不連続」な「プロセス」への理解を含みこんだ社会理論を企図した（Melucci 1996a=2008：28, 32）。

「nascente, nascent」という言葉を，「生まれつつある」という訳語ではなく，「未発の」とした理由として，政治思想史と社会史を架橋しようとした鹿野政直の「未発の一揆」に関する理解が背景に在る。

「日常性の根深さは，革命の一時的喧噪などものともしない」。しかし「実際には，一揆のときだけが異常事態で，その他のときはすべて静謐であったかのように歴史を描くのは，当を得ていない。不平・不満・いらだち・愚痴・怒り・歎き・悲しみ・あきらめ・そねみ，その他もろもろのかたちをとる秩序への違和感は，人びとのうちに不断に醸しだされてきているのが，むしろ常態で，その意味では一件の一揆は，無数の未発の一揆の延長線上にある一つの波頭としての性格を持つ。“平時”においてもそのように未発の一揆が反芻

されるからこそ，一揆の記憶は伝統として生きつづける。そのヴォルテージの高まりが，ある瞬間に一揆として飛翔する。両者を完全に切断し，べつべつの領域に閉じこめるのは，歴史の真相を衝いていない」（鹿野 1988：129）。

鹿野は，日本人の歴史・社会意識と歴史学に関して知識社会学的分析を試みた「岐路にたたずむ意識と社会史」において，1970 年代以後の日本の歴史学会の動向は，阿部謹也や網野善彦を代表とした「社会史の台風」抜きでは語れないとした上で（,「こうした動向を，学界のひとり歩きというのは，もとより当たら」ず,「そのように人びとが，社会史に託して過去を見る角度に，現在に向かい合う彼ら（＝われわれ）の意識が示されている」（鹿野 1988：109-110）。

社会史における「空間」への関心は,「管理された空間のイメージにたいし，それらを拒否するとともに，その場に根をおろしている人びとが造りだした自由な空間の伝統を掘り起こそうとする立場を打ちだしている。こうして空間の主人公としての人間がクローズ・アップされる」（鹿野 1988：142）。「従来まったく別物と考えられていた正常と異常，先進と後進，理性と狂気，健康と病気，生と死等々の概念が意外に近いばかりでなく，むしろ一個人内でも一社会内でも交錯しているのがかえって常態との意識は，こうして瀰漫しつつある。そのことは，人間や社会が，みずからも問題をかかえる存在と認めるのを迫られていることをも意味する。しかも行手が定かにみえぬままに，岐路に立っているという予感に間断なく襲われつつ，いやそれだけにまず，いまを認識しようとの意志，確認したいとの渇望が，高まっているといってよいだろう」（鹿野 1988：146）。

鹿野の「空間」への関心の指摘は，心理分析アプローチでも構造分析アプローチでもない“未発の状態（stato nascente, nascent state）”の動態把握を企図したメルッチの試みと“対比・対話・対位”しうるものと考えた。

2-3. 小括：“未発の状態”の認識と構造

これらの“背景”をふまえたところで，“未発の状態（stato nascente, nascent state）”に関する理解の小括を試みる。

心理分析アプローチと構造分析アプローチ，臨床社会学と社会運動論, 社会史と政治思想史など，“多重／多層／多面”の二項対立を架橋する「場」として，“未発の状態”は設定された。

①もともとこの言葉は，化学反応における「発生期状態（nascent state）」という意味を持っている。物質が化学反応のなかで高い反応性を持つ状態は,「不確定性原理」と組み合わせて考えてみるならば，化学反応が顕在化する瞬間を観察しようとすれば，その観察行為によって対象には再配置（reconstellation/ricostellazione）が起こってしまい，変化の“道行き・道程（passaggio：移行・移動・横断・航海・推移・変転・変化・移ろい）”を「線的」にとらえ「予測」「想定」することは出来ない。しかし，一定の「配置図」で「事」や「物」が置かれることによって，“メタモルフォーゼ（変身・変異）”を誘発する可能性が高い「発生期状態」におかれるというものである。

②“状態（stato, state）”は,「状況」と「条件」のアンビヴァレンスを内包する。中世ラテン語の situare に由来する「状況（situazione）」の situs は，positua，つまり，位置，もののあり方，置かれ方，配置，ひとの姿勢，姿態とかかわる。

ラテン語の condicione から来ている「条件（condizione）」は，いっしょに（con），言う（dicere），同意する（convenire），契約＝同意のうえで決める（stabilire di commune accordo）とかかわる。どちらの言葉にも，人間の主観／主体的側面と客体的側面があるが,「条件」には，相互承認／間主観の契機がある。

③それゆえ，“未発の状態”は認識論としては，プロセスの連続性のなかでの認識主体の側の根本的な転換（「ペリペティア」）となる。そこに

は,「想定」のコントロールの不可能性,(メルッチの言葉によるなら)「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由(a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」「限界を受け容れる自由(free acceptance of our limits)」の問題がある[11]。

④構造の問題としては,「構造の矛盾」から単線的・自動的に社会運動が「線形」に起こるわけではないが,“未発の状態”の顕在化という「状況」として理解される。

⑤“未発の状態”の継続を認識する「条件」,すなわち主体の問題としては,「プレイング・セルフ」(メルッチ)がイメージとして在る。“メタモルフォーゼ”の道行き(passaggio)のなかで,実体主義か異種混交かといった対立からも身体をずらして,肩の力をふっと抜いたときに,少しだけヒジをつけて,しかも微細な変動をしているような状態で,ぶれて,はみ出しつつ,軸をずらしながら,不均衡な動きのなかで,バランスをとりつつすすむ。“流動する根”は,惑星社会の航海者にとっての「港/他者」のイメージであり,そのような航海者は,実は嵐のなかでも,凪のときでも,港でも,それぞれの場のどこかで/どこでも,安らぎ/どよめき,静止しつつ/旅立つ。メルッチは,この“対位する身体(corpo contrapponendo)”のアンビヴァレンスとパラドクス,その豊かさを,静態的にではなく,動きのなかでとらえ表現しようとしていた[12]。既存の社会運動研究や地域社会研究の「フレーム」にはなかなか入ってこなかったが,「3.11 以前」からすでに在ったひとたちであり,“生存の場としての地域社会(Regions and Communities for Sustainable Ways of Being)”[13]に暮らす「弱い主体」の「記録」としてモノグラフには書き込まれているはずである。

⑥それゆえ,「ペリペティア以降」の課題は,十分にはとりあげられてこなかった「動き」,社会過程(プロセス),「諸関係の微細な網の目」の動き,関係性の動態をとらえるためのリフレクシヴな調査研究(Reflextive/reflexive research for perceiving the pulse of relationship)が必要となってくる。

3.“未発の社会運動(movimenti nascenti, nascent movements)”――到達点としての〈毛細管現象/胎動/交感/個々人の内なる社会変動/未発の社会運動〉――

「草の根」の“毛細管現象/胎動/交感”は,「社会の制度変革へとつながる社会運動と成りうるのか」[14]という問いに対して,メルッチ,メルレルとともに提起しようとしたのは,個々人の内なる微細な動きから,何らかの「集合的プロセス」が“多重/多層/多面”的に生まれていく“複合・重合”的な道行き(passaggio)であり,「未発の状態(stato nascente)」(Alberoni 1968;1989)とは,ある特定の「事態/事件」が未だ明示的には起こっていない状態であるが,しかし,この状態から,あらたな枠組が生起しつつある状態,「創発(emergence)」(Cf. Polanyi 1966=2003;2007)が生まれる可能性を持った状態――を把握するための概念装置であり,そのための社会調査の方法を練り上げることであった。

この試みは,「いまだ構築の途上にある」ものであるが,“毛細管現象/胎動/交感/未発の社会運動(movimenti nascenti)”という“創起する動き(movimenti emergenti)”を理解するための概念装置についての現在の到達点を記しておくこととしたい。今日の“惑星社会の諸問題”とは,第一に,従来の制度・理論枠組では解けないような矛盾・対立の客観的な現象形態であり,第二に,それを解くことなしには私たちの“生存”が脅かされるような,いわば“生体的関係的”な,そしてまさにそれ故に,わが身にとって「焦眉の問題(urgent problem)」である。ただしそれは,常に意識されている訳ではない。つまり,問題を

意識する者は様々な地域・集団に偏在している。そして第三に，問題の〈当事者〉が，何かをきっかけとして問題を“知覚”し，微細な動きが時として可視的な集合的プロセスをともない，その最終的帰結としてオルタナティブの提示にまで至らざるをえないような問題を意味している[15]。

以下，現在の理解の到達点を本文に整理しておく。注には，“背景（roots and routes）”となっている微細な動きを“対比・対話・対位”的に配置していく。

――〈毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動〉――

①“毛細管現象（fenomeno della capillarita）”：

個々人の心意／深意／真意のレベル，“深層（obscurity，oscurità）”“深淵（abyss，abisso）”で起こりつつある“毛細管現象”は，“惑星社会”においては，社会の“深層／深淵”における“毛細管現象”と強く連動している。この，社会にとっての「指先」である，特定の個人の“深層／深淵”で始まる“毛細管現象”は，“個・体（indi-viduo corporale）”と“生･体（corpus corporale）”の層を包含する“生体（organismo vivente）”において，“生体的関係的カタストロフ（la catastrofe biologica e relazionale della specie umana）”を“知覚”することで，「せっぱつまって」（日高 1986：129）起こる[16]。

②“胎動（movimenti dell'oscurita antro-pologica）”：

これまで構造やシステムに組み込まれることで確保していた生活が，その生活の「安定」や「豊かさ」の代償に“生存”そのものが危機に瀕するという状況（リスク）を察知・体感し，身体に刻み込まれた社会の構造から，「ピボット・ピン」のように“ぶれてはみ出す（deviando，abweichend）”ことへの不安をこえて一歩を踏み出してしまう。これは，個々人のなかで，集団のなかで，地域のなかで，ひとつの微細な“兆し・兆候”でしかないが，同時多発的に，非規則的に，“雑唱”のかたちで起こることによって，地域小社会において／地域をこえて，“多重／多層／多面”の“胎動（movimenti dell'oscurità antropologica）”として現象していく[17]。

③“無償性の交感（accettazione di guratuità）”：

個々人の“深層／深淵”で，生存の単位としての地域小社会の内部の“毛細管現象”として現象する“胎動”は，資源動員のかたちとは相対的な距離を持ちつつ，“無償性の交感（accettazione di guratuità）”[18]として現象する（たとえば，「いのちをつなぐ」のだという意識で行動する）。これは「承認をめぐる闘争（lotta per riconoschimento）」としての「相互承認（Anerkennung）」でなく，“出会い”[19]，“ただ受けとめる（accettare）”という性質を持つ。「他者，差異，還元できないものを承認する（recognition of the other, the different, the irreducible）」こと，「差異のただなかで，ともに・生きていくことの責任／応答力とリスク（the responsibility and the risk of co-living amongst the difference）」を引き受けることでもある（Melucci 1996a=2008：177-178）。

“無償性／無条件性／惜しみなさ（gratuitousness, guratuità）”の“交感／交換／交歓（scambio, Verkehr）”，そこからの“共感・共苦・共歓（compassione）”は，“ただ受けとめる”という一見受動的な行為のなかに，“低きより（humiity, humble,umiltà,humilis をもって，高みから裁くのでなく，地上から，廃墟から）”，遮蔽しようと思えば出来ないことはないと思われることがら，識ることの恐れを抱くことがらをあえて境界を越えて選び取る，あきらかなる介入（intervento）の暴力を自覚し罪責感とともにその自らの業を引き受けるという“コミットメント（s'engager= 存在との契り）”が埋め込まれている[20]。

④“個々人の内なる社会変動（metamorfosi nell'interno degli individui corpolali ）”と“未発の社会運動（movimenti nascenti）”：

個々人の“心意／深意／真意”，“深層／深淵”

で起こりつつある“毛細管現象”“胎動”“無償性の交感”――このような内なる変動／相互作用をともなって，“かたちを変えつつ動いていく（changing form）”人間が，“見知らぬ明日（unfathomed future, domani sconosciuto）”に直面し，ぶつかり／つながり／つらなる。そこでは，二者から三者へのつながりが突然創られ，「集合的プロセス」が立ち現れる。ごくふつうの人びとによって危機の瞬間に“想起／創起”（すでにあるものが切り結んで起こる化学反応）されたもののなかから，“創起する動き（movimenti emergenti）”となるものがある。

“創起する動き”とは，危機の瞬間に“居合わせ”，その特定の時と場でのみ想起される“智恵（saperi）”，“臨場・臨床の智（living knowledge ）”を突き合わせていく動きのなかで創起される「創発（emergence）」であり，生まれつづける動き（少なからずそのなかには，“破局へと至る”動きも含まれる）のなかに“創起する動き”が散発的に立ち現れる。

つまりは，ひとつのうねりのなかに，一者と二者と三者（個々の身体と個々人の関係，地域，社会）の相互作用とそれぞれの“深層／深淵”における微細な動きが存在している。この一連の“かたちを変えていく動き（changing form）”が持つ個々人（“個・体（individuo corporale）”／“生・体（corpus corporale）”）にとっての意味をとらえた概念が，“個々人の内なる社会変動”となる。さらにこの動きそのものの社会的意味をとらえた概念が，“未発の社会運動”となる。

4.“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるための“未発の”理論と方法へ

“未発の状態”を常態とするような「3.11 以降」の“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する”“毛細管現象／胎動／交感／未発の社会運動”をいかにとらえるのか。こう考え，私たちは，2013 年度より中央大学社会科学研究所に，「3.11 以降の惑星社会」という研究チームをつくり，“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるための理論と方法の“対話的なエラボレイション（co-elaboration, elaborazione dialogante）”を重ねてきた[21]。2014 年 3 月に『“境界領域”のフィールドワーク――惑星社会の諸問題に応答するために』（新原 2014a）という共著を刊行したが，このなかには，メルッチの遺稿「リフレクシヴな調査研究にむけて」が含まれている（Melucci 2000h=2014）。

これは，亡くなる前のA. メルッチが，白血病を発症してからの最も大きな旅となった 2000 年 5 月の日本への旅の途上，投宿先の横浜のホテルで，「昨夜は比較的体調がよかったので，頭に浮かんだことを吹き込んだよ」と言って手渡されたカセットテープのなかにあった言葉を起こした原稿である。

ここでは，関係性の動態への着目，すなわち，社会調査における調査主体と当事者との関係性が，実は，可視的なレベルのみならずメタレベルのコミュニケーションにおいても成り立っていることに着目している。そして，当事者の側のみならず調査主体の側にも複数性と多重性があり，それぞれに固有性を持った個々人同士の二者の関係性が，「遊び（gioco, play）」をもって，ゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れ動いていくなかでなされる営為として，社会調査をとらえた。さらに，このプロセスを，メタレベルも含めて丹念なリフレクションを行い，複数の目で見て，複数の声を重ねて，固有の二者関係をもとにして当事者にも調査結果を返していく（その意味で，お互いに照り返していく），持続的なリフレクションについての提案となっていた。

白血病となる直前のメルッチは，共同研究の成果である『創造力――夢，話，プロセス――』（Melucci 1994b），理論的主著である『プレイング・セルフ』（Melucci 1996a=2008）と，社会運動に関する共同研究である『チャレンジング・コード』

(Melucci 1996b)をとりまとめていた。これらは，師匠であるA.トゥレーヌの「社会学的介入」を批判的に乗り越えようとするなかですすめられた社会運動に関する共同調査研究の成果であった。

しかしながら，調査研究の方法論についての集大成である『リフレクシヴな社会学のために』(Melucci 1996c) を完成させた後，メルッチは，若い共同研究者たちと作って来た調査研究グループを解散させていた。それゆえ，このテープ起こし原稿は，『リフレクシヴな社会学のために』以降の「社会運動の共同調査研究」についてのリフレクションのまとめである。

メルッチが，架橋したいと考えていた社会運動論と臨床社会学についてのリフレクション，その両者を架橋した未発の社会理論と社会調査法の萌芽は，託されたいくつかの草稿，言葉，表情など，「関係性の網の目」のなかに遺されている。

「薬はある特定の条件において直線的な効力を発揮するが，それは副作用をもたらすものでもある。食物も薬も，唐突な形で身体に取り込まれれば，『土地の香り（gusto, sapore, odori di terra)』と分かちがたく結びついた各々の身体がもつ循環を破壊するものでもある。この複合性と複数性をそのままうけとめる“智（cumscientia)”を築き上げたい」(Melucci 2000h=2014：110) とメルッチが語ってくれたことがある。もしいまなおメルッチが生存しつづけてくれているのであれば，どう言葉をつづけただろうか。

「土地の香りと分かちがたく結びついた各々の身体が持つ循環」は，本章で語られた関係性の根幹をなすものであり，その「根源的な問題」をも射程に入れたリフレクシヴな社会理論・社会調査でなければいけない。しかもそのリフレクシヴな社会理論・社会調査は，かたちを変えつつ動いていく（changing form)「循環的な関係性（*circular relationship*)」(Melucci 1996a=2008:127) を持った“療法的でリフレクシヴな調査研究（Ricerca terapeutica e riflessiva, Therapeutic and Reflective/reflexive Research（T&R))”となっていかざるをえないだろう。

“根本的瞬間（Grundmoment)”はあらかじめ「予測」「想定」できない。ただ“居合わせる(Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)”しかない[22]。くりかえし,「ペリペティア」からさかのぼり,“追想／追憶しつづける（keep re-membering, ricordando)”[23]こと。

“サルベージ（沈没，転覆，座礁した船の引き揚げ，salvage, salvataggio)”――，渉猟し（徹底して探しまわり，scour, frugare)，踏破し(traverse, percorrere e attraversare)，掘り起こし（esumare, exhume)，“すくい［掬い／救い］とり，くみとる（scoop up/out, scavare, salvare, comprendere)”こと。いずれは意味を持つ旋律となるかもしれないデータ／エピソードを“対位法”的に収集・蓄積し，「あくまで可能な筆写(trascrizione）のひとつ」として遺していくこと[24]。

つまりは，関係の根（roots of relationship)，関係の道行（routes of relationship)，“関係性の動態を感知する（percepire il passaggio di relatività)”こと,「予測不可能／コントロール不可能な動き」を感知すること（Perceiving the dynamism of relationship)，土地やひとの「パルスを感じとる」こと（Perceiving, listening and sensing the pulse of relationship)，リズムを感じとること（Perceiving, listening and sensing the rhythms of relationship）である[25]。

社会運動論と臨床社会学を架橋し，“未発の状態”を常態とするような「3.11以降」の“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する”“毛細管現象／胎動／交感／未発の社会運動”をとらえる理論と方法の“対話的なエラボレイション”とする――これがメルッチから私たちに託され／遺された“課題”である。

（「想像力」に関する調査を進めるなかで）ジレン

マに直面したことによって，かえって重要な意味を持ったのは，「創造力」に関する実質的な定義を確定してしまわずに，当事者との対話や調査メンバー間の対話のなかで，解釈の配置変えをしていくことに対して開かれた理論（teorie disponibili）をつくろうとしたことだった。そこでは，ことなる文化的背景を持った専門的集団が，それぞれに創造力を生み出している。調査のプロセスにおいては，大きく揺れ動きつつも，客観的な立場に立つということも，リフレクシヴでありつづけるということも，避けて通ることは出来ず，自らが生産する知や認識のあり方（流儀）の特徴に対して持続的な注意を払うというかまえを保ちつつ，このエピステモロジーのジレンマのなかで生きていくしかない。

……こうして，創造力という概念には複数の意味が組み込まれたものとなり，この認識のあり方が調査研究グループ内部にも組み込まれ，これまでの調査研究のプロセスそのもののなかにある多重性が顕在化した。この自らに対してもリフレクシヴな調査研究の実践を通じて，社会を認識するための調査研究の意義を鼓舞する多元的で双方的な性質の意義を再確認したのである（Melucci 2000h=2014：102-103）。

1） A. メルッチは，1943 年にイタリアのエミリア＝ロマーニャ州リミニで熟練労働者の息子として生まれ，ミラノ・カトリック大学で哲学を学んだメルッチは，カトリック青年運動に参加し，ボローニャ大学で臨床心理学を学ぶアンナ夫人と知り合った。そして国立ミラノ大学大学院で社会学を学んだ後パリに留学し，A. トゥレーヌ（Alain Touraine）のもとで社会運動を研究すると同時に，臨床心理学の博士号を取得する。J. ハーバーマス（Jürgen Habermas）や Z. バウマン（Zygmunt Bauman）との学問的交流を経てイタリアに帰国，サッサリ大学，トレント大学，ミラノ大学を歴任したが，2001 年白血病でこの世を去った。新しい社会運動とアイデンティティの不確定性をめぐる現代社会理論の旗手として知られるようになる一方で，アンナ夫人との共同研究により“個々人の内なる社会変動（change form，metamorphose）”に関する膨大な質的調査と精神療法／心理療法の実践の成果をイタリア語で作品化していった。

2） A. メルレルは，1942 年にイタリア北部の都市トレントで生まれ，家族とともにブラジルへとわたり，サンパウロで青年時代を過ごした。ブラジル・南米社会で最も尊敬された社会学者 O. イアンニ（Octavio Ianni）の指導のもと，サンパウロ大学大学院を卒業後，アメリカ，アフリカ，ヨーロッパの各地の大学で教育活動を行い，イタリアに「帰還」した後は，地中海の島サルデーニャの国立サッサリ大学（創立 1562 年）に勤務し，地域社会研究所（FOIST）の所長としてこの島の地域形成に寄与してきた。メルレルはまた，世界各地の島嶼社会の研究・文化交流の中心人物の一人であり，サッサリ大学の島嶼社会比較研究所（ISC）の所長，地中海島嶼社会の諸問題を研究することを目的とした国際研究組織である地中海研究所 ISPROM の主任研究員，地中海島嶼社会に関する雑誌『レス・メディテラネア（Res Mediterranea）』の編集委員でもある。人の移動に伴って，都市において形成される“社会文化的な島々”の社会学的研究が，イタリア，ドイツ，スウェーデン，スペイン，ポルトガル，フィンランド，ルーマニア，ノルウェー，スロヴェニア，ハンガリー，アイルランド，レウニオン，カーボベルデ，ブラジル，アルゼンチン，パラグアイ，ウルグアイ，チリ，ペルー，ボリビアなどの研究者とともに「人の移動と文化交流のプロジェクト（EUROMIR）」を進めてきた。最近では，「世界の島嶼地域の大学間ネットワーク（R. E. T. I. = Rete di eccellenza dei Territoriali Insulari）」で中心的役割を果たし，2010 年 7 月にはコルシカ，2011 年 7 月にはマデイラで，地中海・大西洋地域そしてミクロネシアなどから 20 以上の大学の学長が集まり，「島嶼社会が直面する諸問題についての領域横断的な研究交流」の具体化についての話し合いがなされた。メルレルは，「島の自然：文化，智恵，社会組織（NICSOS = Nature delle isole：culture，saperi，organizzazioni sociali）」というセクションの責任者であり，「島嶼社会の陸地と海洋資源の統合的マネジメント（Managemento integrato dei territori insulari e risorse marine）」と「持続的発展と島嶼社会のアイデンティティ（Sviluppo sostenibile e identità dei territori insulari）」を研究テーマとしている。近年は，共同研究者 A ヴァルジウ（Andrea

Vargiu）とともに，ローカル・ノリッジ概念を発展させた“臨場・臨床の智（living knowledge）”の研究を，The international Science Shop Network のかたちで，ヨーロッパ内外の他の研究者とともに推進している（cf. http://www.livingknowledge.org/livingknowledge/）。

3）　A. メルッチそしてA. メルレルという二人の盟友であり師友である社会学者それぞれと筆者との間で積み重ねられた“社会学的探求”については，（新原 2007a；2009b；2010）を参照されたい。メルッチとの協業については（新原 2004a：2009a）（Melucci 1996a=2008；2000f；2000g；2000h=2014）（Niihara 2003a；2003b；2008）を，メルレルとの協業については（新原：1990；1992a；1992b；1997a；2009b）（Niihara 1989；1992；1994；1995；1997）（Merler 2003=2004；2004=2006）（Merler e Niihara 2011a=2014；2011b）などを参照されたい。

4）「3.11 以降」の考察については，（新原 2011c；2011e；2012a；2013a；2013b）などを参照されたい。

5）“未発の社会運動（movimenti nascenti）”については，（新原 2003b；2006c；2012a；2013a）などを参照されたい。可視的な社会運動や「集合的プロセス」の“深層／深淵”における微細な動きについては，これまで考察を重ねてきた（新原 1991b；1997a；1998c；2006d；2007b）。特定の二者の“深層／深淵”における共感・共苦・共歓と「聴くことの二重性と二者性」については，（Melucci 2000f=2001）を参照されたい。

6）　くりかえし非意識的に構築してしまう「問題解決」を生み出す「知的様式（intellectual style）」（Galtung 2003=2004）については，（新原 2014d）で言及している。この点についてメルッチは，2000 年 5 月の来日時に日本でおこなった「聴くことの社会学」と題された講演において，以下のように述べている。

> いまわれわれはこのような意味での変化がなにをもたらしたのかを目にしています。しかしながら，なにが起こっているかを認識することは，きわめて困難です。というのは，われわれの思考の形式，準拠枠はいまだに過去の産物であり，過去を向いているからです。しかしそれでもなお，この地球上に人間が人間存在として生存しつづけるためには，この変化の質を認識することがきわめて重要でありましょう。
> ……社会学そして社会科学は，産業社会すなわち可視的かつ認識可能な形で社会関係をつくりあげる社会に固有の認識の形式として生まれました。そこでは，眼に見える社会関係を認識することを可能とする知の形式が産み出されました。とりわけ社会的なるものへの智であるところの社会学は，最初からリフレクシブな知の形式をもって生まれました。個々の社会に固有の性質を認識しようとする態度，社会的なるものへの智は最初からリフレクシブであったのです。
> しかし，今日われわれは産業社会の時代とはことなる状況にいます。というのは，今日では，まさにわれわれが，自らの行為によって，自らの社会関係によって，そしてまさにわれわれが社会的に存在しているということによって，社会そのものを産出しているからです。つまり，われわれは，われわれが手にした力によって自らを破壊することも可能であるということ，あるいは遺伝子操作によって，われわれの生命としてのありかたの根本にまで介入可能であるという事実は，もはやわれわれの生存がわれわれ自身の手にゆだねられているということを意味しているのです。
> それゆえ知の役割もまた，決定的かつ根本的に変わってこざるを得ません。当初からリフレクシブなものとして生まれた社会学的な知は，今日ではますますわれわれの社会生活の内部に浸透しています。われわれがそこに参加しているところの社会は，つねに社会自身を認識することを求めており，知はますます社会的行為と結びついています。これはもはや専門的に社会を認識するという形式においてのみならず，われわれの日常生活においても言えることです。というのは，われわれのだれもが，もはや日常生活においても，社会についての認識を活用しつつ自らの行為を決定しており，そうした認識に由来する行動の指針のモデルをつねに吸収しつづけているからです。ですから，特別なだれかでなくわれわれのだれもが，もっとも基本的な日常生活の諸行為の中で，社会認識を消費し，享受しており，たとえそのことに気付いていなかったとしても，じつに大量の社会認識が，た

とえば消費行動のような日常的な行為の中に蓄積され，組み込まれていっています。ですから，社会のきわめて重要かつ質的な変化は，社会認識のありかた，その歴史的展開の根幹とかかわる変化でもあるのです。(Melucci 2000f=2001：3-4)。

7) 「線」「点」という言葉の背景には，人間が，「円(circle) もしくは循環 (cycle)」「矢 (arrow)」「点(point)」という三つのメタファーによって，時間を定義しようとしてきたとするメルッチの「時間のメタファー」についての議論がある (Melucci 1996a=2008：11-34)。メルッチの「時間のメタファー」については，(新原 2008a；2011b) などを参照されたい。メルッチと新原の理解によれば，「モダニゼーション」とは，「円や循環」の時間感覚が，「矢」にとって代わられるプロセスであり，「モダニティ」とは，「矢」という枠組みが個々人の中に内面化している状態である (「矢印」で時間を「理解」する「性向」)。さらにこの直線的時間は，接続されていない「点」の間での移動，時間が「いま」という「点」でのみ意味をもつような瞬間の連続，すなわち「点」の時間にとって代わられつつある (いま私たちは，「矢印」的な因果関係よりも，「先行きが見えない／を見ない」刹那的感覚のなかで生きつつある)。これがいわば，「ポスト・モダンの状況」なのだが，さらに，「モダン／ポスト・モダン」という軸とは異なる文脈であるはずの「グローバリゼーション」についての議論が，まさに「切断された点」として，偏在し散発し，消長をくりかえしている。この「切断された点」は，むしろ恣意的な結びつきをすることによって，「気がついたらすでに一定の『方向性』を造り出して」いく。だとすれば，必要なことは，「円／矢／点」の恣意的な結びつきが，「これまで」の予測をこえる形での様々な「異変」を生み出しつつある現代社会において，〈意味や要求〉と〈権力と社会統制〉が実際に“ぶつかり合う”個々の場面を，具体的によく見ていくことである。眼前の「焦眉の問題」を考えるときに，一見そこから「遠く離れた (apart from)」場所から，“対位的 (contrapuntal, polyphonic, disphonic and displaced)”に見ることは，〈既存の枠組の範囲内で「模範解答」への道を急いでしまう「性向」〉をもった私たちが，少しでもその慣習行動から“ぶれてはみ出す”可能性へとつながるはずである (cf. 新原 2011b)。

8) 微細な心身／身心の反応・動きへの着目は，(新原 2010) のなかで紹介したメルッチの日本での講演「情報社会化のなかでの身体への関心が意味するもの――これまでの知的形成の道程とかかわって」(後に「痛むひと (オミネス・パツィエンテス) ――社会学的探求 (“Homines patientes. Sociological Explorations)”」と改題)，2000 年 5 月 16 日，於．一橋大学を参照されたい (Melucci 2000g)。
またこうした“兆し・兆候 (segni, signs)”をとらえる“心身／身心現象”に関する問題意識から，『未発の「第二次関東大震災・朝鮮人虐殺」の予見をめぐる調査研究』という調査研究をおこなった (新原 2007b)。いささか奇異 (？) なタイトルを持つ本調査研究は，十年ほどの間かかわってきた神奈川でのフィールドワークでの「出来事」から着想されたものである。その「出来事」とは，「人権」や「環境」や「国際」にかかわるボランティア活動をしている複数の「在日日本人」から，「〇〇のような人間は，もし大地震が起こったりしたら，関東大震災のときみたいに，きっと殺されてしまいますよ」という言葉が発せられたというものであった。どちらかいえば，「立派な市民」であり，「礼儀正しく親切な」部類に属し，悪く言うひとはほとんどいないそのひとたちの差別性・危険性を警戒しつづけていたのは，“移動民の子供たち (children of immigrants)”だった。「第二次関東大震災」はこの報告書刊行の時点，そして 2014 年 9 月現在ではまだ起こっていない。しかし，この十数年で，「内なる国際化の主人公」から，いつのまにか「治安強化」の対象となっているという体験をした人びとから見て，彼らをとりまく「市民」(とりわけ「援助の手をさしのべてくれる」) と，その「市民」を正式な成員として成り立っている社会とはどのようなものなのか，というのが，もっとも大きな関心事であった。
“兆し・兆候”をとらえる主体については，“総代”“世間師”そして“移動民”の議論を (新原 2006c) で，そして“異端の予言者 (profeta estranea)”という議論を (新原 2007a) で展開し，(新原 2013a) では，「現在を生きる『名代』の声を聴く」というかたちで論じた。

9)　メルッチはこのように語っている。

今日，じつにしばしば，「世界は深いところで変化してきたし，そしてつねに変化している」という言い方を耳にします。新聞やテレビでの一般的な議論の中で，頻繁にこうした表現に出会うということにはいかなる意味があるのでしょうか。「深いところで変わった」という言い方には，人類史においてほとんどはじめて，これまでの歴史において一度も直面したことがないほどの変化が生じたという意味がこめられています。たしかにこの50年ほどの間に，それ以前の1000年の歴史において体験してきたであろうような変化と比しても，きわめて根本的なところで，この地球に暮らす人間の諸条件の変化を私たちは生み出してきました。それゆえ，この「深いところで（profondamente）」という言葉はきわめて真剣なものです。そしてまたこれと同時に「世界はつねに変化している」と言われています。これはすなわち，私たちがすでに生み出してしまった変化，いま生み出しつつある変化が「不可逆的なもの（irreversibile）」であるということ，もはやもとの場所に還ることはできないような変化を産み出してきたし，また生み出しつづけているということを意味しています。たしかにこのような意味での変化は人類がはじめて直面した事態です。たとえば，核，遺伝子操作などはまさに好例なのですが，これらはまさに，私たちがすでに獲得してしまった力，そんなものは持っていないのだと自らを偽ったり，そのことを忘れることが決してできないような力の証人として眼前にあります。私たちに出来ることは，それをどう扱うかについての決断のみです。つまり私たちは，まさにはじめて本当の意味で人類史の岐路に立っています。これは過去の時代において変化がなかったということではなく，近年私たちが生み出しつづけている変化の諸相が，深くそして不可逆的なものであるということによっているのです（Melucci 2000f=2001：2-3）。

10)　“未発の状態”の顕在化については，（新原 2010；2011b；2012a）などで論じてきている。

11)　「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由」「限界を受け容れる自由」については，（新原 2009a；2014b）などで論じている。

12)　メルッチは同時期に刊行した『チャレンジング・コード』（Melucci 1996b）と『プレイング・セルフ』（Melucci 1996a=2008）の間で，“対位法（contra-punctus）”を試みている。集合行為に対する集団的な研究である『チャレンジング・コード』ではanbivalenceを縮減するという構造的発想からの現代社会論を，単著としてまとめたものだが背景には療法なプロセスの関係性をもった多くのひとたちがいる『プレイング・セルフ』では，anbivalenceを生きる身体の側から惑星社会を展望した。

13)　“生存の場としての地域社会”の背後には，“地域（terra, region, territory, field, element）”さらには，“地（terra, terrain/ground/soil）”と“場（luogo, spazio, posto, sito, caso, circostanza, momento, condizione, situazione）”があり，“地”の固有性と行き会う／生き合うことで蓄積されてきた“智恵（saperi）”“智（cumscientia）”，“臨場・臨床の智（living knowledge）”が在る。「複雑性のもたらすジレンマ」（Melucci 1996a=2008：173）がもたらす問題――原発・震災問題も含めた“多重／多層／多面の問題（the multiple problems）”に対して，「生活」や「生き方（Ways of living）」だけでなく，「いのち」さらには“生存の在り方（Ways of being）”にまで及ぶ価値観の見直しへの責任／応答力（responsibility）が求められている。自己の“生存の在り方”の見直し（ways of livingからways of beingにかけての意味の産出）については，（新原 2003b）および（大門 2012）を参照されたい。

14)　2002年10月にミラノで開催された追悼シンポジウムでは，「晩年のメルッチが，個々人の内面の問題に関心が集中し社会紛争に取り組まなくなった」という批判がなされ，これに対して，「臨床の社会学は社会紛争の意味を明かにすることと同義であり，個々人の行為のつらなりの中に社会紛争を見出すのが，今日の社会学者の役割だ。新しい社会運動の誕生を，“痛む”という行為の産出として見るべきだ」という応答がなされた（cf. 新原 2004c；2010）。

また，2012年8月サッサリで開催された「エネルギー選択，市民社会，生活の質」をめぐる対話」のシンポジウムにおける新原道信「フクシマ原発事故：エネルギー選択，市民社会，生活の質」という報告に

対して，「たしかに，『草の根』の動きには一定の社会的意味があると思うが，それは将来的にいかなる政治勢力となっていく可能性があるのか」「社会統制，システムの復元性といった観点から考えると，私は悲観的とならざるをえない。『福島のおかげで』イタリアの原発の再開を停止するという国民投票が成立したが，それは表面的かつ一過性の現象だ。イタリアの市場，経済，政治の状況は旧態依然のままだ。とりあえず『No』とは言ったものの，なにか解決策や代替案が提示されたわけではない。だとすると，散発的かつ偶発的な動きは結局のところ既存のシステムに取り込まれていき，イタリアも日本も，公共事業や拠点開発中心の政治体制という『もと来た道』にもどっていくのではないか」という見解が提示された（新原 2013a：60）。

15）“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動”の整理については，（新原 2013a：2014a）で行っており，3 節の本文はこれらと重複している。

16）日高六郎の「市民生活に直接関係する諸問題に，行政も政党も労働組合も十分に対応することができないでいる状況の中でせっぱつまって」（日高 1986：129）の運動より示唆を受けた。

17）イタリアでも「草の根はどよめく」というテーマで報告したの双葉町民の「出郷」や毎週金曜日の国会議事堂・首相官邸前のデモの「動き」より着想を得ている（新原 2013a：56-58）。

18）「無償性（*gratuitousness*）」についてメルッチは，以下のように論じている。「日常生活の体験が展開する目下の環境においては，パートナーとの関係性とは別に，愛のもつ偶発的な性質が子どもたちとの関係にも影響してくる。生物学的な親子関係が自然の必然性から逃れるとき，親－子の関係性も，選択の無償性に基づくものになっていく。このことは，大人－幼児の関係性に深い変化をもたらす。子どもたちは，かつて描いていたような両親の生物学的な系統によるつながりではもはやありえず，また純粋に繁殖し養育する対象，つまり私たちが社会の価値や規範を託す器でもありえない。子どもたちは，いまや個人としての自律性を授けられた個人であり，愛の関係性のなかでのパートナーでもある。さらに言うなら，遊びの驚き，答えられない問いへの驚きを，私たちにいまなお学ばせてくれることのできるパートナーでもあるのである。」（Melucci 1996a=2008：171-172）

19）“出会い”については，「他者との出会い」に関するメルッチの下記のような理解と結びついている。「……出会いの苦しみと喜びは，微妙な均衡の中にある。他者性の挑戦に向き合えるかどうかは，自己を失うことなく他者の観点を引き受ける力にかかっている。感情移入（empathy）は，日常言語の中にいまや入り込んでいる用語であり，それは他者の近くにあること，他者の観点から物事を見ることができるということを示している。しかしこれは往路にすぎず，空虚や喪失から自分を守らねばならない。私たち自身のなかにしっかりと錨をおろしたまま，私たちの自己と他者の自己との間の空白に橋を架けるという力をもたないのであれば，そこに出会いはなく，単に博愛や善意があるにすぎない。出会いは，意味の二つの領域（region）をいっしょにする。そしてそれは，私たちが調整している異なった振動数をもつ二つのエネルギーのフィールドを，互いに共鳴するところにまでもっていく。出会いは，苦しみ，感情，病を・ともにすること（*sym-pathy*）である。すなわちそれは，自らの情動や力のすべてをふりしぼって，内からわきあがる熱意をもって，喜び，高揚し，痛み，苦しみに参加すること・ともにすること（*com-passion*），ある他者と・ともに・感じている（*feeling-with-another*）ということである。ここで発見するのは，意味は私たちに帰属するものではなく，むしろ出会いそれ自体のなかで与えられるものであり，にもかかわらず，それと同時に，私たちだけがその出会いを創り出すことができるということである。」（Melucci 1996a=2008：139-140）

20）このテーマについては，『震災と市民』をテーマとした協業のなかで，稿をあらためて執筆する。

21）とりわけ，Alberto Merler，Anna Melucci，古城利明，中村寛，鈴木鉄忠，友澤悠季，阪口毅などとの集中的，集合的，“対話的にふりかえり交わる（facendo riflessione e riflessività）”営みによって，概念を整えた。

22）“居合わせる”は，イタリア語では trovarsi sui momenti nascenti, critici, determinati, cruciali e al bivio だが，英語の“居合わせる”は，Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place とした。苦しみ，感情，

病をともにすること（sym-pathy），自らの情動や力のすべてをふりしぼって，内からわきあがる熱意をもって，喜び，高揚，痛み，苦しみに参加すること，ともにすること（com-passion），ある他者とともに感じている（feeling-with-another）こと――イタリア語で直訳すると trovarsi per caso，居合わせたひとは（i presenti）となるが，「その場にいる」は essere sul posto，「巡り合う」だと incontrarsi per caso となる。英語の copresence にあたる言葉としては，イタリア語では copresenza e compresenza という造語が出てくる。“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動”の現場に「居合わせる（trovarsi sui momenti nascenti）」「なにかが生まれつつある複数の瞬間にその場に居合わせる」となるが，「生まれつつある（nascenti）」のところは，「決定的（definitivi, determinate, cruciali）」「特定の（particolari）」「危機的（critici）」「岐路に立つ（al bivio）」などの複数の言い方が含まれている。ペリペティアにより隠蔽されていたことがらの心意／深意／真意が顕在化し，“メタモルフォーゼ（変異 = change form / metamorfosi）”が起こるしかない「状況／条件」を表しているという点で，「決定的な瞬間に立ち会う（essere a un momento cruciale）」ことでもある。

23）“追想／追憶しつづける（keep re-membering, ri-cordando）”は，英語の remember に相応するイタリア語 ricordare が cor cordis = “cuore”，すなわち記憶の場と信じられていた心臓から来ている。「member」の membrum と remember の memorari を重ね合わせて，re-membering そして ri-cordando となる。記憶（Erinnerung）と“特定の場と時間に生起したことがらを忘却する性向（amnesia）”との間にある“想起（anamnesis）”とかかわって，“すべてのことを忘れずに（memento momenti）”“想起／追憶しつづける（re-membering, ri-cordando）”“想起（anamnesis）”“存在と契りを結ぶ（s'engager）”，くりかえし忘却させられたものを想起しつづけるという意味で，keeping anamnesis でもある。

24）サイードの下記の言葉を想起されたい。

そもそも，権力とは縁のない状態のままで，嘆かわしい事象の一部始終をつぶさにみてとる現場証人となることは，けっして単調で退屈なことではないだろう。このようなことをするには，かつてミシェル・フーコーが「仮借なき探究（a relentless erudition）」と呼んだものをおこなわねばならない。すなわち，オールターナティヴな可能性を垣間見せる材源を徹底して探しまわり，埋もれた記録を発掘し，忘れられた（あるいは廃棄された）歴史を復活させねばならない。また，このようないとなみを成功させるには，劇的なもの，反抗的なものに敏感に反応するような感性を養い，ただでさえすくない発言の機会を最大限利用し，聴衆の注意を一身にひきつけ，機知とユーモア，それに論争術で敵対者を凌駕するよう心がけねばならない。

虚飾と尊大な身振りよりも，自己に対する冷笑こそ似つかわしく，言葉を濁すことよりも，ずけずけものをいうことのほうが似つかわしい。しかし，そうなると，このような表象行為をつづける知識人には，やむをえないことながら，政府高官とは，お近づきになれないし，彼らから国家的な名誉を授かることもなくなる。これは，孤独なむくわれない生きざまといえばまさにそのとおりである。けれどもこれは長いものに巻かれろ式に現状の悲惨を黙認することにくらべたら，いつも，はるかにまともな生きかたなのである（Said 1994=1998：23-24）。

25）この概念の整理は，ニューヨーク滞在中の中村寛とのメールの“交感／交換／交歓”によって，2014年8月から9月にかけてなされた。

引用・参考文献

Alberoni, Francesco, 1968, *Statu Nascenti*, Bologna: Il Mulino.

———, 1989, *Genesi*, Milano: Garzanti.

古城利明, 2006「序」古城利明監修, 新原道信他編『地域社会学講座　第2巻　グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂。

———, 2011a「総論・地域社会学の構成と展開［新版］」地域社会学会編『キーワード地域社会学 新版』ハーベスト社。

———, 2011b『「帝国」と自治――リージョンの政治とローカルの政治』中央大学出版部。

———, 2014「再び“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”へ」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。

Galtung, Johan, 1984, “Sinking with Style”, Satish Kumar (edited with an Introduction), *The Schumacher lectures. Vol.2,* London: Blond & Briggs.（= 1985, 耕人舎グループ訳『シュマッハーの学校——永続する文明の条件』ダイヤモンド社）

———, 2003, *Globalization and intellectual style : seven essays on social science methodology,* 2003（= 2004, 矢澤修次郎・大重光太郎訳『グローバル化と知的様式——社会科学方法論についての七つのエッセー』東信堂）

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1970, *Werke in 20 Bänden mit Registerband: Bd. 8: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse 1830. Erster Teil. Die Wissenschaft der Logik,* Frankfurt am Main: Suhrkamp.

日高六郎, 1986「市民と市民運動」似田貝香門他編『リーディングス日本の社会学　10　社会運動』東京大学出版会。

真下信一, 1972『思想の現代的条件——一哲学者の体験と省察』岩波書店。

———, 1979「思想者とファシズム」『真下信一著作集　第2巻』青木書店。

Melucci, Alberto, 1982, *L'invenzione del presente. Movimenti, identità, bisogni individuali,* Bologna: Il Mulino.

———, 1984a , *Altri codici. Aree di movimento nella metropoli,* Bologna: Il Mulino.

———, 1984b, *Corpi estranei: Tempo interno e tempo sociale in psicoterapia,* Milano: Ghedini.

———, 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society,* Philadelphia: Temple University Press.（=1997, 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民：新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店）

———, 1991, *Il gioco dell' io: Il cambiamento di sè in una società globale,* Milano: Feltrinelli.

———, 1994a, *Passaggio d' epoca: Il futuro è adesso,* Milano: Feltrinelli.

———, 1994b, *Creatività: miti, discorsi, processi,* Milano: Feltrinelli.

———, 1996a, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society,* New York: Cambridge University Press.（= 2008, 新原道信他訳『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』ハーベスト社）

———, 1996b, *Challenging Codes. Collective Action in the Information Age,* New York: Cambridge University Press.

———, 1996c, *Verso una sociologia riflessiva: Ricerca qualitativa e cultura,* Bologna: Il Mulino.

———, 2000a, *Zénta: Poesie in dialetto romagnolo,* Rimini: Pazzini.

———, 2000b, *Giorni e cose,* Rimini: Pazzini.

———, 2000c, *Parole chiave: Per un nuovo lessico delle scienze sociali,* Roma: Carocci.

———, 2000d, *Diventare persone: Conflitti e nuova cittadinanza nella società planetaria,* Torino: Edizioni Gruppo Abele.

———, 2000e, *Culture in gioco: Differenze per convivere,* Milano: Il saggiatore.

———, 2000f, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”.（= 2001, 新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域——自己決定・協働，その主体　地域社会学会年報13』ハーベスト社）

———, 2000g, “Homines patientes. Sociological Explorations (Homines patientes. Esplorazione sociologica)”, presso l'Università Hitotsubashi di Tokyo.（= 2010, 新原道信「A. メルッチの境界領域の社会学— 2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学20号（通巻233号）において抄訳）

———, 2000h, “Verso una ricerca riflessiva”, regisrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama.（= 2014, 新原道信訳「リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部）

———, 2002, *Mongolfiere,* Milano: Archinto.

Melucci, Alberto e Anna Fabbrini, 1991, *I luoghi dell' ascolto: Adolescenti e servizi di consultazione,* Milano: Guerini.

———, 1992, *L' età dell' oro: Adolescenti tra sogno ed esperienza,* Milano: Guerini.

———, 1993, *Prontogiovani: Centralino di aiuto per adolescenti: Cronaca di un' esperienza,* Milano: Guerini.

Merler, Alberto, 1988, *Politiche sociali e sviluppo composito,* Università degli Studi di Sassari.

———, 1989, “Tre idee-forza da rivedere: futuro, sviluppo, insularità”, in *Quaderni bolotanesi,* n.15.

———, 1990, “Insularità. Declinazioni di un sostantivo”, in *Quaderni bolotanesi,* n.16.

———, 1991, “Autonomia e insularità. La pratica dell'autonomia, vissuta in Sardegna e in altre isole”, in *Quaderni bolotanesi,* n.17.

———, 1996, *Regolazione sociale. Insularità. Percorsi di sviluppo,* Cagliari: EDES.

———, 2003, *Realtà composite e isole socio-culturali: Il ruolo delle minoranze linguistiche.*（ = 2004, 新原道信訳「“マイノリティ”のヨーロッパ―“社会文化的な島々”は,“混交, 混成し, 重合”する」永岑三千輝･廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社）

———, 2004, *Mobilidade humana e formação do novo povo / L'azione comunitaria dell'io composito nelle realtà europee: Possibili conclusioni eterodosse.*（= 2006, 新原道信訳「世界の移動と定住の諸過程―移動の複合性・重合性から見たヨーロッパの社会的空間の再構成」新原道信他編『地域社会学講座　第２巻　グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂）

———, 2010, *Altri scenari. Verso il distretto dell'economia sociale,* Milano: Franco Angeli.

Merler, Alberto et al., 1982 *Lo sviluppo che si doveva fermare.* Pisa-Sassari: ETS-Iniziative Culturali.

Merler, Alberto e G. Mondardini 1987 “Rientro emigrati: il caso della Sardegna”, in *Antropos*, n. 18.

Merler, Alberto, G.Giorio e F. Lazzari (a cura di), 1999, *Dal macro al micro. Percorsi socio-comunitari e processi di socializzazione,* Verona：CEDAM.

Merler, Alberto, M. Cocco e M. L. Piga, 2003, *Il fare delle imprese solodali. Raporto SIS sull'economia sociale in Sardegna.* Milano: Franco Angeli.

Merler, Alberto and Andrea Vargiu, 2008, “On the diversity of actors involved in community-based participatory action research”, in *Community-University Partnerships: Connecting for Change*：proceedings of the 3rd International Community-University Exposition (CUexpo 2008), May 4-7, 2008, Victoria, Canada. Victoria, University of Victoria

Merler Alberto e M. Niihara, 2011a, “Terre e mari di confine. Una guida per viaggiare e comparare la Sardegna e il Giappone con altre isole”, in *Quaderni Bolotanesi,* n.37.（= 2014, 新原道信訳「海と陸の“境界領域”―日本とサルデーニャを始めとした島々のつらなりから世界を見る」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部）

———, 2011b, “Le migrazioni giapponesi ripetute in America Latina”, in *Visioni Latino Americane - Rivista semestrale del Centro Studi per l'America Latina,* Anno III, Numero 5.

新原道信, 1988,「対抗文化の可能性―沖縄・広島・長崎における生活の見直しと自立への動き」『平和運動の思想と組織に関する政治社会学的研究』（昭和 60-62 年度科学研究費補助金（総合Ａ）研究成果報告書, 研究代表者・吉原功）。

———, 1990「小さな主体の潜在力―イタリア・サルデーニャ島の「開発･発展」をめぐって」季刊『窓』第３号。

———, 1991a「地域の内発的発展の先行条件に関する一考察―サルデーニャにおける『地域問題』把握の過程と知識人」千葉大学文学部『人文研究』第 20 号。

———, 1991b「統合ヨーロッパの内なる『島』と『群島』―イタリア・サルデーニャの移民が選択した協同への回路」『思想と現代』第 25 号。

———, 1992a「〈島嶼社会論〉の試み―「複合」社会の把握に関する社会学的考察」千葉大学文学部『人文研究』第 21 号。

———, 1992b「ひとつのヨーロッパ・もうひとつのヨーロッパ—イタリアにおける“複合社会”論の展開が意味するもの」関東社会学会『年報社会学論集』第5号。
———, 1992c「沖縄の自立と内発的発展を考える——地中海島嶼社会との比較で」日本平和学会『平和研究』第17号。
———, 1992d「イタリア社会の再発見—“混成社会”に関する社会学的考察」千葉大学文学部『人文研究』第22号。
———, 1993「方法としての地中海への“旅(itinerario)”—日本社会と日本人を再発見するために」奥山真知・田巻松雄編『20世紀末の諸相—資本・国家・民族と「国際化」』八千代出版。
———, 1995a「“移動民”の都市社会学—“方法としての旅”をつらねて」奥田道大編『21世紀の都市社会学　第2巻　コミュニティとエスニシティ』勁草書房。
———, 1995b「『素人』の学としての沖縄関係学」『沖縄関係学研究会　論集　創刊号』。
———, 1996『横浜の内なる社会的・文化的“島”に関する実証社会学的研究』かながわ学術研究交流財団。
———, 1997a『ホモ・モーベンス—旅する社会学』窓社。
———, 1997b「“移動民(homo movens)”の出会い方」『現代思想』vol.25-1。
———, 1998a「Over Sea Okinawas……それは境界をこえるものの謂である」川崎市文化財団『EGO-SITE　沖縄現代美術1998』。
———, 1998b「THE BODY SILENT —身体の奥の眼から社会を見る」『現代思想』vol.26-2。
———, 1998c「境界領域の思想—『辺境』のイタリア知識人論ノート」『現代思想』vol.26-3。
———, 1998d「そこに一本の木があって—サルデーニャのことがらが語る地域社会論のために」専修大学現代文化研究会『現文研』No.74。
———, 1998e「島への道—語り得ぬすべてのものを語るという試み」『ユリイカ』No.407, vol.30-10。
———, 1999「“異文化”を“社会学する”」玉水俊哲・矢澤修次郎編『社会学のよろこび』八千代出版。
———, 2000a「“恐怖の岬”をこえて—サイパン，テニアン，ロタへの旅」『EDGE』No.9-10合併号。
———, 2000b「『ストリート・コーナー・ソサエティ』を読む」『書斎の窓』No.496。
———, 2001a「生起したことがらを語るという営みのエピステモロジー」大阪大学『日本学報』No.20。
———, 2001b「境界のこえかた—沖縄・大東島・南洋」立命館大学『言語文化研究』Vol.13-1。
———, 2001c「聴くことの社会学のために—二〇〇〇年五月の“賭け(progetto)”の後に」『地域社会学会年報13』ハーベスト社。
———, 2001d「“内なる異文化”への臨床社会学—臨床の“智”を身につけた社会のオペレーターのために」野口裕二・大沼英昭編『臨床社会学の実践』有斐閣。
———, 2001e『多文化・多言語混成団地におけるコミュニティ形成のための参加的調査研究』科学研究費補助金基盤研究（C）報告書（研究代表者・新原道信）。
———, 2002「旅」永井均他編『事典　哲学の木』講談社。
———, 2003a「ヘテロトピアの沖縄」西成彦・原毅彦編『複数の沖縄—ディアスポラから希望へ』人文書院。
———, 2003b「自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編『講座社会学15　社会運動』東京大学出版会。
———, 2003c「地中海の島々から見た“深層のヨーロッパ”“願望のヨーロッパ”」『中央評論　特集・歴史の中の欧州統合』通巻244号。
———, 2004a「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ—差異と混沌を生命とする対位法の“智”」永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社。
———, 2004b「ともに旅をして，対比・対話し，考える(Viaggiare, comparare, pensare)」『評論』No.143。
———, 2004c「生という不治の病を生きるひと・聴くことの社会学・未発の社会運動—A・メルッチの未発の社会理論」東北社会学研究会『社会学研究』第76号。
———, 2006a「深層のアウトノミア—オーランド・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部。
———, 2006b「他者を識る旅」中央大学『中央評論』

No.256。
———，2006c「序」「現在を生きる知識人と未発の社会運動―県営団地の“総代”“世間師”そして“移動民”をめぐって」「あとがき」新原道信・奥山眞知・伊藤守編『地球情報社会と社会運動―同時代のリフレクシブ・ソシオロジー』ハーベスト社。
———，2006d「いくつものもうひとつの地域社会へ」「あとがき」古城利明監修，新原道信他編『地域社会学講座　第2巻　グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』東信堂。
———，2007a『境界領域への旅―岬からの社会学的探求』大月書店。
———，2007b『未発の「第二次関東大震災・朝鮮人虐殺」の予見をめぐる調査研究』科学研究費補助金基盤研究（C）調査報告書（研究代表者・新原道信）。
———，2007c『21世紀“共成”システム構築を目的とした社会文化的な“島々”の研究』科学研究費補助金基盤研究（B）学術調査報告書（研究代表者・新原道信）。
———，2008a「『グローバリゼーション／ポスト・モダン』と『プレイング・セルフ』を読む―A. メルッチが遺したものを再考するために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学18号（通巻223号）。
———，2008b「訳者あとがき―「瓦礫」から“流動する根”」A. メルッチ，新原道信他訳『プレイング・セルフ―惑星社会における人間と意味』ハーベスト社。
———，2009a「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐって―古城利明とA. メルッチの問題提起に即して」『法学新報』第115巻，第9・10号。
———，2009b「境界領域のヨーロッパを考える―移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市大論叢』人文科学系列，第60巻，第3号。
———，2009c「“生身の現実を観察する”という社会学の実践感覚について」中央大学通信教育部『白門』第61巻第9号。
———，2010「A. メルッチの“境界領域の社会学”―2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学20号（通巻233号）。
———，2011a『旅をして，出会い，ともに考える』中央大学出版部。
———，2011b「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ―『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学21号（通巻238号）。
———，2011c「死者とともにあるということ・肉声を聴くこと―2011年3月の震災によせて」メールマガジン「大月書店通信」第28号（2011.4.26）所収。http://www.otsukishoten.co.jp/files/memento_mori_20110426.pdf，http://www.otsukishoten.co.jp/news/n2274.html
———，2011d「“境界領域”のフィールドワーク―サルデーニャからコルシカへ」『中央大学社会科学研究所年報』15号。
———，2011e「出会うべき言葉だけを持っている―宮本常一の“臨場・臨床の智”」『現代思想　総特集＝宮本常一　生活へのまなざし』vol.39-15。
———，2012a「現在を生きる『名代』の声を聴く―“移動民の子供たち”がつくる“臨場／臨床の智”」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学22号（通巻243号）。
———，2012b「“境界領域”のフィールドワーク（2）―カーボベルデ諸島でのフィールドワークより」『中央大学社会科学研究所年報』16号。
———，2013a「“惑星社会の諸問題”に応答するための“探究／探求型社会調査”―『3.11以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学23号（通巻248号）。
———，2013b「“境界領域”のフィールドワーク（3）―生存の場としての地域社会にむけて」『中央大学社会科学研究所年報』17号。
———，2014a『“境界領域”のフィールドワーク―惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。
———，2014b「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに―3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（1）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号（通巻253号）。
———，2014c「A. メルッチの『創造力と驚嘆する力』をめぐって―3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために（1）」『中央大学社会科学研究所年

報』18 号。

———, 2014d「『3.11 以降』の惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“限界状況の想像／創造力”— 矢澤修次郎，A. メルッチ，J. ガルトゥング，古城利明の問題提起に即して」『成城社会イノベーション研究』第 9 巻 , 2014 年 12 月。

Niihara, Michinobu, 1989, “Sardegna e Okinawa: Considerazioni comparative fra due sviluppi insulari,” in *Quaderni bolotanesi,* n.15.

———, 1989, “Alcune considerazioni sulla vita quotidiana e sul processo dello sviluppo. Confronto fra due processi: Giappone Okinawa e Italia Sardegna,” in *Il grandevetro,* n.102.

———, 1992, “Un tentativo di ragionare sulla teoria dell'insularità. Considerazioni sociologiche sulle realtà della società composita e complessa: Sardegna e Giappone,” in *Quaderni bolotanesi,* n.18.

———, 1994, “Un itinerario nel Mediterraneo per riscoprire il Giappone e i giapponesi, Isole a confronto: Giappone e Sardegna,” in *Quaderni bolotanesi,* n.20.

———, 1995, “Gli occhi dell'oloturia.” Mediterraneo insulare e Giappone,” in *Civiltà del Mare,* anno V, n.6.

———, 1997, “Migrazione e formazione di minoranze: l'altro Giappone all'estero e gli'estranei' in Giappone. Comparazioni col caso sardo,” in *Quaderni bolotanesi,* n.23.

———, 1998, “Difficoltà di costruire una società interculturale in Giappone,” in *BETA*, n.3.

———, 1999, “Integrated Europe as Viewed from Mediterranean Island”, in T.Miyajima, T.Kajita & M.Yamada (eds.), *Regionalism and Immigration in the Context of Europian Integration,* JACAS Symposium Series No.8, The Japan Center for Area Studies – National Meseum of Ethnology, Osaka, July 1999, pp.63–69.

———, 2003a, “Homines patientes e sociologia dell'ascolto,” in Luisa Leonini (a cura di), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci,* Milano: Guerini.

———, 2003b, “Il corpo silenzioso: Vedere il mondo dall'interiorità del corpo,” in Luisa Leonini (a cura di), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci,* Milano: Guerini.

———, 2008, “Alberto Melucci: confini, passaggi, metamorfosi nel pianeta uomo,” nel convegno: *A partire da Alberto Melucci …l'invenzione del presente,* Milano, il 9 ottobre 2008, Sezione Vita Quotidiana – Associazione Italiana di Sociologia, Dipartimento di Studi sociali e politici – Università degli Studi di Milano e Dipartimento di Sociologia e Ricerca Sociale – Università Bicocca di Milano.

———, 2010, “I servizi socio-educativi in Giappone: una comparazione,” nel convegno: *Sistema formativo e servizi socio-educativi per le famiglie, per le scuole, per le comunità,* Sassari, il 15 luglio 2010, Laboratorio FOIST per le Politiche Sociali e i Processi Formativi con il patrocinio di Sezione di Sociologia dell'educazione e Sezione di Politica sociale – Associazione Italiana di Sociologia, Università degli Studi di Sassari.

———, 2011, “Crisi giapponese — Conseguente al disastro nucleare degli ultimi mesi” , nel *Seminario della Scuola di Dottorato in Scienze Sociali,* Università degli Studi di Sassari.

———, 2012, “Il disastro nucleare di FUKUSHIMA. Scelte energetiche, società cvile, qualitàdella vita” , nel *Quarto seminario FOIST su Esperienze internazionali nell'università,* Università degli Studi di Sassari.

大門正克，2012「『生活』『いのち』『生存』をめぐる運動」安田常雄編，大串潤児他編集協力『社会を問う人びと—運動のなかの個と共同性』岩波書店。

Said, Edward W., 1994, Representations of the intellectual: the 1993 Reith lectures, London : Vintage.（= 1998，大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社）